

大隅基礎科学創成財団の支援者の皆様へ

新年あけましておめでとう御座います。

今年が、皆様にとって明るい年になることをお祈り申し上げます。

昨年は、ほぼコロナの話題に明け暮れ、行動も様々な制約を余儀なくされ、財団の活動も、多くのイベントを中止せざるを得ませんでした。一方、オンライン会議などを活用することで、実は効率よく議論を深めることができることも学びました。

今年度の研究助成も予定通りに無事に進めることができました。財団活動開始から4年目を迎え、特徴ある研究助成として定着しつつあると感じています。これも本財団の趣旨に賛同し、支えて頂いている個人、企業、団体の方々のご支援の賜物だと感謝の念に堪えません。

今年から、企業と連携した新しい研究活動として微生物機能探究コンソーシアムが本格的にスタートします。輝かしい伝統を持ちながら、近年研究者が分散し、十二分に力を発揮し難くなっている微生物学分野の新しい展開、大学・企業の研究力の向上の契機につながる前例のない新たな活動となることを切に願っています。

皆様と直接お話をする機会が依然として困難な中、様々な工夫をして財団の活動を展開し、基礎科学をより身近に感じていただけるよう努力をする所存です。皆様方の一層のご支援と財団を少しでも沢山の方に知って頂くためにご協力をお願いします。



2021年1月

公益財団法人 大隅基礎科学創成財団
理事長 大隅良典

内容

1. 第4期上半期活動	-----	2
2. 創発セミナー	-----	3
3. 研究助成対象研究者からのメッセージ	-----	6
4. あとがき	-----	11

1. 第4期 上半期（2020/8～2021/1）活動

1) 研究助成

第4期研究助成では、一般生物学研究（基礎科学（一般））124件の申請より9件、酵母を対象とした基礎研究（基礎科学（酵母））28件の申請より3件、計12件の助成を決定しました。第1期から第4期までの採択件数合計は39件となりました。

2) 創発セミナー

基礎研究者と企業との新たな連携を構築する場として、創発セミナーを年間9回開催する予定です。上半期は、オンラインを活用して4回開催します。

第1回（2020年9月23日）

「大学と企業の新しい連携」をテーマとしてアドバイザー会議をオンライン形式で開きました。

第2回（2020年10月29日）

微生物機能探究コンソーシアムのキックオフシンポジウムをオンライン形式で行いました。好熱菌の研究で世界的に著名な大島泰郎氏の記念講演の後、コンソーシアムの研究テーマのリーダーからコンソーシアムの構成と活動計画の説明がありました。

第3回（2020年12月18日）

第3回創発セミナー（第4期研究助成贈呈式）を、東京工業大学すずかけ台会場参加とオンライン参加のハイブリッド形式で開きました。大隅良典理事長、選考委員長の話の後、北潔氏（長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 研究科長）が講演をしました。



第4回（2021年1月29日）

「植物に学ぶ 一巧妙な環境応答のしくみー」をテーマとして、長谷部光泰氏（自然科学研究機構基礎生物学研究所 副所長）及び豊田正嗣氏（埼玉大学大学院理工学研究科 准教授）による講演とディスカッションを行います。

2. 創発セミナー

2020 年度 第 2 回創発セミナー

「微生物機能探究コンソーシアム」立ち上げシンポジウム報告

公益財団法人 大隅基礎科学創成財団

理事 大谷 清

2020 年 10 月 29 日（木）、微生物機能探究コンソーシアム（略称：微生物コンソーシアム）のキックオフシンポジウムをオンライン形式で開きました。アカデミア、産業界などから 70 人近くの参加者が集まりました。

冒頭、財団の大隅良典理事長が挨拶し、微生物コンソーシアム立ち上げの狙いについて次のように説明しました。

「生物学の中でも微生物への理解が今ほど重要になっている時期はない。にもかかわらずたとえば新型コロナでも疫学的な研究が中心で、基礎研究へ関心が向いていないのが現状だ。大学でも微生物の研究は農学、医学、工学、理学、薬学などに分かれ、共通の研究の場が失われている。企業の協力も得て微生物の新しい、未知の機能を探究するコンソーシアムを立ち上げ、生物学、基礎科学の発展に貢献したい。このシンポジウムが微生物学の大切さを理解して頂く機会になることを期待する」

続いてシンポジウムに移り、好熱菌の研究で世界的に著名な大島泰郎氏（共和化工環境微生物学研究所顧問、東京工業大学名誉教授）が「好熱菌 耐熱酵素 環境」をテーマに記念講演しました。内容は以下の You Tube をご覧ください。

<https://youtu.be/MaYBeCvPb-Y>



コンソーシアムは今後も参加企業を募り、企業と大学の新しい関係に基づく微生物の基礎研究を深めていきたいと考えています。

2020 年度 第 3 回創発セミナー講演

ミトコンドリアの多様性 — 基礎研究から創薬ターゲットまで

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 研究科長（東京大学名誉教授）

北 潔

私が生化学に興味を持ったのは予備校時代に読んだ江上不二夫先生の「生命を探る」という岩波新書だった。東大に入って薬学部の安楽泰弘先生のもとで大腸菌の研究テーマをいただき、その後理学部でちょうど米国から帰国して助手をされていた大隅先生ともご一緒し、基礎研究の濃密な年を過ごしたのを記憶している。



寄生虫、感染症との出会いは順天堂大学に異動して寄生虫のエネルギー代謝の基礎研究を始めた時。その後 JICA（国際協力機構）の厚生省中央研究所プロジェクトにチームリーダーとして参加し、パラグアイに赴任してさらに大きく展開した。かの地にはシャーガス病（アメリカトリパノソーマ）はじめ寄生虫由来の様々な感染症があり、しかもそのほとんどに薬がなく、多くの患者が苦しんでいるのを目の当たりにした。

バラグアイの経験に衝撃を受け、帰国して東大医科学研究所（医科研）の寄生虫研究部に入り、これが私にとって大きな転機になった。医科研は北里研究所と地理的に極めて近く、当時、北里研究所におられた大村智先生（2015 年ノーベル生理学・医学賞）から創薬ターゲットを目指して一緒に研究しようと誘われたのである。

現在、私は寄生虫ミトコンドリアの特殊な呼吸鎖酵素を標的とする感染症治療薬の開発に取り組んでいる。感染症は大きく分けて三つに分類される。AIDS、マラリア、結核の 3 大感染症、新型コロナウイルスのような新興感染症、マラリアのように撲滅（eradication）までに至らず再び感染の広がりが心配されている再興感染症の三つだ。

しかし実は世界には、人々の関心の薄い「顧みられない熱帯病（NTD、Neglected Tropical Diseases）」が数多く存在する。WHO（世界保健機構）の定義ではその数は 20、その半分以上が寄生虫由来で、かつ特效薬がない。

その中で私が取り組んでいるのは回虫、エキノコックス、トリパノソーマ、マラリア、そしてがん、ウイルスなどに対する薬剤開発だ。回虫の成虫は小腸の中にいて酸素がなくてもエネルギー通貨とも呼ばれる ATP（アデノシン 3 リン酸）を作ることができる。標的の結晶が作れるようになって創薬に道が開け、日本農薬と共同で抗線虫薬を開発している。

エキノコックス症は日本の北海道でも毎年 50-60 人が新規に罹患する病気で、肝臓に穴が開いて死に至ることもある。キタキツネが感染源とされ、これも治療薬がない。

抗アフリカ眠り病薬にアスコフラノン

トリパノソーマ症はアフリカ眠り病という病気で、家畜も感染する。ロベルト・コッホがウガンダに病院まで作って対策を試みた。この病気はツェツェバエという吸血性のハエが媒介するトリパノソーマという寄生虫が体内に入り込み、感染する。中枢神経系が侵されて眠るような状態になり、最後は昏睡、死に至る。

我々はアスコフラノンという化合物が、このトリパノソーマが生き続けるためのエネルギーを作る酵素の働きを妨げることを発見した。アスコフラノンは 1972 年に田村學造東大教授が発見した化合物で、抗がん作用や免疫増強作用のあることが知られていた。

トリパノソーマはミトコンドリアにある TAO（シアン耐性酸化酵素）という特殊な酵素を使ってエネルギーを作るが、アスコフラノンはこの酵素の働きを抑える。

そこで TAO の構造解析を行い、これにアスコフラノンと結合させて構造活性相関を行って薬効を予測した。実際にトリパノソーマに感染したマウスにアスコフラノンを投与すると血液中のトリパノソーマは見る見るうちに姿を変え死滅していった。3 分後には 1 匹もいなくなる即効性も確認された。ヤギで実験すると 3 カ月以上、再燃しなかった。

我々はアスコフラノンの生合成遺伝子群を明らかにし、これで実用化に向けた誘導体の合成が低コストで可能になったと考えている。アスコフラノンが有力な抗ウイルス・がん薬候補とされるのはその高い抗寄生虫活性と高い安定性、それに抗ウイルス・抗がん活性が発見、確認されたためだ。

抗マラリア、新型コロナウイルスに 5-ALA

マラリアは死者の数がピーク時の 2 分の 1、年間約 40 万人に減り、WHO は 2030 年までに 90% 減らす計画を立てていたが、新型コロナの影響で再び 100 万人に増える恐れがある。治療

と予防の進歩でこの病気の control (制圧)、elimination (排除) までは可能になったが、eradication (撲滅) までは至っていない。

最近、このマラリアに 5-ALA (アミノレブリン酸) が有効であることが分かってきた。5-ALA は天然に存在するアミノ酸でヒトや動物、植物の細胞内で作られ、すべての生物の生存に必須のアミノ酸。食品中にも含まれていて我々の生活の中で摂取されているし、10 年以上前からサプリメントなどの各種のヘルスケア製品にも活用されている。

生物は細胞内のミトコンドリアという小器官で生存に必要なエネルギーを作り出す。5-ALA はこのミトコンドリアが機能するうえで重要な役割を果たしている。5-ALA はミトコンドリア内で最終的に「ヘム」という物質に変化するが、このヘムがエネルギーを作り出すために必要不可欠なタンパク質の成分になるからだ。

われわれは 5-ALA がミトコンドリアの機能を高め、感染症に対する防御に大きな働きをしていると考えている。マラリア治療薬として開発を進めていて、インドやタイではヒトでの治験が始まっている。

実はこの 5-ALA はがん、ウイルス症にも効く。すなわち我々の研究では新型コロナウイルス (COVID-19) の増殖を完全に抑えることを発見した。COVID-19 の原因ウイルスである SARS-CoV-2 ウイルスを用いて試験管内で細胞の感染試験を行った結果、5-ALA に強い感染抑制効果のあることを見出した。現在、論文投稿中だ (bioRxiv 誌に公開)。

このように天然物は自然からの贈り物であり、多様なミトコンドリアはその薬剤標的として重要である。ノーベル生理学・医学賞の対象になった大村智先生の駆虫薬イベルメクチン、中国の女性研究者トゥ・ヨウヨウ先生の抗マラリア薬の発見を例に挙げるまでもなく、薬剤としての天然物は大変重要な存在だ。生まれた国によって子供に差別が生まれるような世界をなんとかしてなくしたい、そんな思いでこれからも基礎研究から創薬にいたる努力を続けていきたい。

3. 研究助成対象研究者からのメッセージ

今年度（第4期）の助成対象となった12名の研究者からのメッセージをご紹介します。

河野 憲二（第4期 一般）

兵庫県立大学 生命理学研究科 特任教授

この度第4期の研究助成を頂けたこと、大変感謝しております。研究テーマは「ジフタミドの生理的役割の解明」であり、これは私が助手として研究を始めた時の最初の研究テーマでありました。私としては最初の10年でその当時できることは全てやったつもりでしたが、この修飾アミノ酸ジフタミドが何故古細菌から真核生物のeEF2全てに保存されているか、その理由を明確にすることはできませんでした。しかし近年ゲノム編集やヒトタンパク質合成 pure system など新しい技術が開発されたことから、哺乳動物系で再チャレンジすることにしました。私は定年退職をして4年目となり、研究費を得るのが大変厳しい状況にあります。本財団は定年を迎えた研究者にも相応の理由があれば配慮してくれるという、大変心の広い財団であります。この助成金を最大限有効に使わせて頂きジフタミドの生理的役割の本質にできる限り迫りたいと思っております。



小牧 伸一郎（第4期、一般）

奈良先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 助教

この度は、大隅基礎科学創成財団の名誉ある助成金に採択して頂き、誠にありがとうございました。大隅先生をはじめとする財団の方々、そして審査に関わってくださった方々に心より御礼申し上げます。研究テーマとして掲げる、植物が高頻度に起こすゲノム倍加の原因の解明は、自分の「知りたい」という純粋な気持ちから生まれたものですが、植物の研究、特にすぐには応用につながらない基礎研究は、賛同を得られないことも多く、このまま続けてよいものかと迷うこともありました。そのため、先日の贈呈式における、知りたいという気持ちを前面に出した研究をして下さいとのお言葉には、不安な気持ちを取り除き、背中を押して頂いたように感じております。植物のゲノム倍加が、どのような分子メカニズムで引き起こされ、またどのような役割を果たしているのかという、「知りたい」謎の答えを見つけ出し、皆様にご報告できるよう、更なる努力を重ねて参ります。



酒井 達也（第4期、一般）

新潟大学 理学部 教授

このたびは大隅基礎科学創成財団の第四期研究助成に採択していただき、誠にありがとうございます。さらに研究活動を頑張りなさいと激励された気持ちでいます。大隅先生を始め、審査に関わった先生方の期待に応えられるように頑張りたいと思います。本研究は、植物の芽生えがどのように光源方向を認識し、器官の偏差成長を誘導して、光屈性とよばれる環境応答を示すのか、その分子機構の解明を目指しています。2年先になんらかのまとまった成果が報告できればと思います。先日の贈呈式は新型コロナの影響でオンライン参加となりました。直接、大隅先生にお礼を伝え、写真と一緒に撮りたかったのですが、それが叶わず残念でした。新型コロナの影響は若い世代、そして未来の日本に大きなダメージを与えています。研究支援を受ける意味を自らに問い、人類の歴史にも現在の社会にもささやかながらでも貢献する活動ができればと考えています。



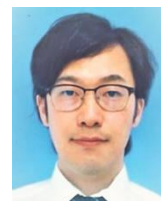
高岡 勝吉 (第4期、一般)

徳島大学 先端酵素学研究所 准教授

この度は第4期研究助成に採択していただき、感謝申し上げます。大隅良典先生をはじめ、審査員の先生方に御礼申し上げます。

私が研究し始めようとしている「発生休止」は、数日から1年もの長期にわたって胚発生が休止する現象で、少なくとも130種の哺乳類で確認されています。現象は150年前にシカで観察され、同様の現象がマウスなど他の哺乳類でも存在することが確認されましたが、その分子メカニズムはほとんど不明なままです。実は、修士の学生だった頃に発生休止の実験を行った際に、「なんで止まれんの？」とずっと不思議に思っていた現象の1つでした。

先生方の期待を胸に今後より一層、発生休止の分子メカニズムの解明に取り組んでいきたいと思っています。ありがとうございました。



西村 芳樹 (第4期、一般)

京都大学大学院 理学研究科 助教

助成対象に採択していただきましたこと、心から感謝を申し上げます。科研費獲得は毎年繰り返される綱渡りのようで、日々苦慮していますが、本研究のお陰で研究に集中することができました。昨今の科研費申請では、常に応用や社会的貢献についての記述が求められます。そうした中、純粋な科学的好奇心や興味に基づく研究を後押しして頂いたことを、大変嬉しく思いました。それと同時に、自分がそう感じてしまうほど、今日の日本において基礎研究が難しくなっていることも痛感しました。予め出口が決まった研究も大切ですが、今も昔も、未知の領域に対する好奇心は、心を躍らせるばかりでなく、いずれ社会を大きく変える力の源であると感じます。本研究助成に採択され、大隅先生や選考委員の先生のことば、他の採択者の方々の研究を拝聴する中で、その大切さを再認識致しました。今後とも、一層気を引き締めて研究に邁進していきたいと思っています。



星 元紀 (第4期、一般)

お茶の水女子大学 サイエンス & エデュケーションセンター 研究協力員

定年退職後は、重要な問題ではあるが院生などの研究テーマにはし難い長年の懸案について、自らの手で実験を行い、最後の論文として次世代に申し送りしたいと願っていた。しかし、いざとなってみると実験できる場所を公的に確保することが先ず困難であり、これなしには科研費等の申請もできない。仮に申請しても、定年退職後日の経った者の申請は実質的に審査の対象にはならないと言われている。知人の研究室の片隅を借り、その研究室にあるものは片端から使わせてもらっても、独自に必要な消耗品も少なからずある。現職時代の研究費を思えば僅かな額でも、年金生活で賄うのは容易ではない。知人の行為に甘えまくって細々と続けてきたが、いよいよこれ迄かと思いだしたところで、本財団は年齢に関係なく助成していただけると知った。採択していただき心より感謝している。これを励みに、刺胞動物に見られる「奇妙」な受精機構の解明にむけ、さらに努力したい。



堀 沙耶香（第4期、一般）

東京女子医科大学 医学部 生理学講座 講師



この度は貴財団の第4期研究助成に採択していただき、大隅良典先生をはじめ、審査員の先生方、貴財団の皆様、寄付を寄せてくださった皆様に心より感謝申し上げます。「すぐ役立つ研究」が求められる昨今、基礎科学を賛助する貴財団の創意に敬服いたしますとともに、自分自身の研究人生に自信を得ることができました。私は、幼少期より生き物の多彩な行動に魅了されています。現在は、線虫 *C. elegans* を弱く刺激すると頭を引っ込め、強く刺激すると文字通り「しっぽを巻いて逃げる」ことを見つけ、定量的な評価系を確立しました。特定の神経細胞のシナプスと、自閉症リスク因子などの相同遺伝子がこの行動切り替えに必要なことも突き止め、詰めの実験中です。自由度が高く、まとまった額の研究助成は、現在独立することを目指す身として大変有り難く、励みになります。大切に遣わせていただきます。重ねて御礼申し上げます。

宮成 悠介（第4期、一般）

金沢大学 ナノ生命科学研究所 准教授



コロナ渦の中、2020年4月より現所属に着任しました。着任初日から在宅勤務を言い渡され、不自由な状況が続く中、ラボのセットアップをおこないました。そんな折に、大隅基礎科学創成財団からの研究サポートをいただけることになりました。私は、大隅先生と同じ福岡県立福岡高校の卒業生です。2020年12月に開催された助成金の贈呈式は、コロナ感染の第3波の襲来によって、オンライン参加となりました。画面越しに撮る大隅先輩との記念撮影は、嬉しくもあり、寂しくもありました。日々研究をするうえで、常に頭の片隅にあるのは、「どうやったらノーベル賞を受賞できるような研究ができるのか？」です。誰もやっていない独創的な研究を目指す、言葉で言うのは簡単ですが、実際に体現するのは容易ではないです。今年で43歳。いつの間にか研究者としては中堅になりますが、初心を忘れずに、近くの小石を拾うような研究をするのではなく、大きな目標に向かって愚直に頑張っていきます。財団からの助成金、夢への架け橋となるよう、大事に使わせていただきます。

山崎正和（第4期、一般）

秋田大学 大学院 医学系研究科 准教授



この度は、貴財団の研究助成に採択して頂きまして心より感謝申し上げます。採択のご連絡を頂いた時は本当に嬉しく、大いなる励みとなりました。私が着目する平面内細胞極性（PCP）は、上皮細胞の頂端-基底軸に直交する組織平面内の極性です。PCPの典型例として、特定の方向に配向する、ショウジョウバエや動物の体毛などが挙げられます。これまでの研究から、PCPを司る機構は進化的に保存されており、その異常は様々な疾患の原因となることも明らかとなっております。通常、PCPに関わる遺伝子の異常により、ショウジョウバエの毛の向きは様々な方向へと乱れますが、これまでに私はショウジョウバエの毛の向きが逆転する現象を複数見出し、その分子機構に関する研究を現在展開しております。「既存の概念や知識では解釈が難しい奇妙な現象にこそ、真に面白い事が隠れている」と信じ、研究に邁進する所存です。貴財団の益々のご発展を心よりお祈り申し上げます。

佐藤 政充（第4期、酵母）

早稲田大学 先進理工学部 教授

助成対象に採択していただき、感謝申し上げます。大学1年時に生物学（大隅良典教官）の単位を不勉強不注意で落とした私が、他ならぬ大隅先生の財団からご支援を賜り、約30年ぶりに単位を獲得できた気分です。

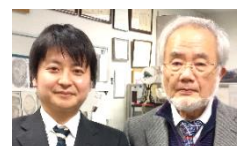
対象研究は、シングルセル技術を導入して分裂酵母の胞子が発芽する機構を解明するものです。酵母研究者の誰が出会う生理現象で、一般的にもカビの胞子が飛び散ると忌避される認知度の高い現象ですが、その分子機構は未知の世界です。発案した当初は、研究室メンバーから「どないやねん」「また訳のわか…」とツッコミを受けるほど無謀な砂上の楼閣として呆れられました。それがご支援をいただくに至り、大隅財団の基礎科学に対する情熱の大きさと寛大さに心からの感謝と敬意を表します。また、研究に従事した学生にも感謝しています。現状に満足せず、ご支援をもとに新しい生理現象の発見に努めていきたいと思ひます。



細見 昭（第4期、酵母）

信州大学 農学部 農学生命科学科 助教

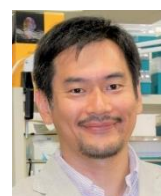
この度は第4期研究助成に採択頂き深く感謝申し上げます。私は、出芽酵母 *Saccharomyces cerevisiae* を用いて、小胞体への輸送を規定する小胞体シグナルペプチドを持たないタンパク質の輸送機構を研究しております。真核細胞において、通常は小胞体シグナルペプチドを持っているタンパク質は小胞体内へ輸送され、持っていないものは輸送されません。一方で、シグナルペプチドを持たないにもかかわらず小胞体内へ輸送され得るタンパク質が存在します。当たり前の外側にある本現象を大変興味深く感じております。本研究はアウトサイダー的である懸念を抱いておりましたが、大隅基礎科学創成財団から本研究を採択頂いたことにより、このよく分からない現象を解明することを強く後押しして頂いたと思ひ大変心強く感じております。酵母コンソーシアムフェローとして、アウトサイダーになることを恐れず突き進みたいと思ひます。



守屋 央朗（第4期、酵母）

岡山大学 大学院 環境生命科学研究科 准教授

大隅基礎科学創成財団の研究助成に採択頂きありがとうございました。「酵母コンソーシアムフェロー」の称号を頂くことを、この研究助成が始まって以来の目標としていましたので大変うれしいです。私の研究のゴールは、「酵母を知り尽くす」ことです。遺伝子が6,000足らずのシンプルな真核生物の酵母なら、もしかしたら生きていくうちに可能なんじゃないかと思っています。何をもって知り尽くしたことになるのか？例えば、酵母の生理応答が全部説明可能になることです。私は過剰発現実験をやっています。「なんでこのタンパク質を過剰発現したら酵母は死ぬの？」「それはこういう理由です。」これがどんなタンパク質についても可能になる、そういう世界を目指したい。今回の助成では過剰発現による新しいスクリーニング系（ADPOT）を発展させます。これまでのスクリーニングで説明不可能な遺伝子が沢山とれてきています。酵母を知り尽くすゴールにはまだまだ遠いことを思ひ知らされ、悔しくてしかたないです。



第1期の研究助成対象の4名の酵母研究者には、コロナ禍の影響で研究期間を2020年12月まで延長することを可としました。この度、助成期間が終了した2名の方よりメッセージをいただきましたので、ご覧ください。

木村 洋子（第1期、酵母）

静岡大学 農学部 応用生命科学科 教授

今までご支援頂き大変ありがとうございました。大隅財団から頂いた研究費は、私たちの研究の命綱でした。頂いた研究費で熱ストレスの研究を続けることができ、篤く御礼申し上げます。

私は、基礎研究は、まだ誰も知らない、わかっていない根本原理や現象を探しだし、それらを明らかにしようとする研究だと思っています。したがって、すぐには社会に貢献できないことも多く、またその結果も混沌としたものが多いのも事実ですが、多くの研究者の努力によって、さまざまな新しい発見が蓄積されていきます。

アップルの創始者・故スティーブ・ジョブズは、生前、イノベーションにおける点（ドット）をつなげることの大切さを語りました(Connecting the dots)。彼は「将来をあらかじめ見据えて、点と点をつなぎあわせることなどできない。できるのは、後からつなぎ合わせることだけだ。」と述べていました。点（ドット）とは抽象的な言葉ですが、出来事、発見、データ、技術など広く解釈できます。私は、基礎研究は新しいドットを見つけたり、ドットを作る営み(Finding or making a new dot)であると考えて、非力ですが自分の研究に取り組んでいます。



前田 達哉（第1期、酵母）

浜松医科大学 医学部 医学科 総合人間科学講座 教授

私たちの研究にご支援をいただきましてまことにありがとうございました。おかげさまで、コロナ禍という難局にも関わらず、最小限の遅滞だけで研究を継続することができたことに感謝いたします。

コロナ禍のために、この一年で私たちの生活は一変してしまいました。百年に一度と言われるこの厄災に立ち向かうためには、政策決定の基本に合理的な判断が必須であることは私たち科学者には自明のことであったのですが、それに逆行するような流れが多く見られました。さらには、科学的に明らかに誤りである主張が、訂正されることの無いままにマスコミやSNSで垂れ流されることが今もって続いています。この世界には科学的に扱うべき問題というものがある、それは科学の領分であるという当たり前のことが私たちの社会に根付くまでの途は遠いことを再認識しましたが、まずは、大隅先生のおっしゃる「自分の研究のファンを作る」ことから始めようと思います。



4. あとがき

1月早々、理事長の大隅良典らノーベル生理学医学賞受賞者4人が連名で政府に向けて4項目のコロナ対策の緊急声明(www.ofsf.or.jp 参照)を発表しました。その中で当財団の使命と重なるのが「ワクチンや治療薬等の開発原理を生み出す生命科学及びその社会実装に不可欠な産学連携の支援を強化すること」です。その一端を担う当財団は改めて責任の重さを痛感しています。研究助成の財源はいうまでもなく皆さまから寄せられる貴重な寄付金です。改めてお礼を申し上げますとともに、財団の活動をさらに充実させる中で日本の基礎科学を一層発展させるために、今後とも皆様のご支援をお願い申し上げます。

〒226-8503

神奈川県横浜市緑区長津田町 4259 S2-16

TEL: 045-459-6975

FAX: 045-459-6976

E-mail: info@ofsf.or.jp

URL: www.ofsf.or.jp

発行責任者 大 隅 良 典

